



[目次]

男女共同参画学協会連絡会第5回シンポジウム参加報告.....	1
記 事	
I. 全国委員会承認事項 .....	3
II. 書評依頼図書.....	4
III. 寄贈図書.....	4
IV. 後援・協賛.....	4
V. 地区会報告.....	4
お知らせ	
1. 公募.....	11
2. 第28回(2007年度)関東地区生態学関係修士論文発表会開催のお知らせ .....	11
書 評.....	12
会 則.....	15
京都大学生態学研究センターニュース .....	18

## ◆会費

会費は前納制で、学会の会計年度は1月から12月までです。  
新年度の会費は12月に請求をします。会費未納者に対しては6月、9月に再請求します。  
下記会費（地区会費）を次の口座にお振込ください。

郵便振替口座番号 01070-6-19256 口座名：日本生態学会

会費滞納2年で会誌の発送停止となり、3年で退会処分となります。

### 会員の区分と個人会員の権利・会費

		A 会員	B 会員	C 会員
配布*	Ecological Research + 生態誌*	○	○	
	保全誌		○	○
投稿**	生態誌	○	○	
	保全誌	○	○	○
大会発表	全セッション	○	○	
	自由集会	○	○	○
総会・委員 (選挙・被選挙権)		○	○	○
年会費	正会員	11,000	13,000	5,000
	学生会員	8,000	10,000	2,500
	団体会員	20,000	22,000	14,000

\*Ecological Research および生態誌については冊子を必要としない会員への割引制度があります。

\*\*Ecological Research への投稿権利は会員に限定しません。

### 地区会費（正・学生会員のみ）

北海道地区：200円 東北地区：800円 関東地区：600円 中部地区：0円  
近畿地区：400円 中国・四国地区：400円 九州地区：700円

問い合わせ先：日本生態学会事務局

〒603-8148 京都市北区小山西花池町1-8

Tel&Fax 075-384-0250 E-mail kaiin@mail.esj.ne.jp

## 男女共同参画学協会連絡会第5回シンポジウム参加報告

将来計画専門委員会

男女共同参画学協会連絡会（以下「連絡会」と略記、<http://annex.jsap.or.jp/renrakukai/>）主催の第5回シンポジウムが、2007年10月5日（金）に名古屋大学の野依記念学術交流館・物質科学研究館で開催された。日本生態学会からは、可知直毅（将来計画専門委員長）、鈴木節子（名古屋大学・ポスドク）、増田理子（名古屋工業大学・教員）、山内 淳（将来計画専門委員）、山本進一（全国委員）の5名が参加した。

今回のシンポジウムのテーマは「真の男女共同参画へ向けて意識を変えよう！」である。可知自身、内永ゆか子さん（元日本IBM取締役、現NPOジャパン・ウイメンズ・イノベティブ・ネットワーク理事長）の特別講演「科学技術分野におけるダイバーシティの考え方」を聞き、まさに意識を変えることになったシンポジウムであった。

連絡会に加盟しているすべての学会で、女性会員の比率は一般会員の方が学生会員に比べて低い。生態学会の場合、学生女性会員35%に対して一般女性会員は13%である。また、人事制度上、男女の区別はないはずなのに、分野を問わずポスドク、助教、准教授、教授とポストがあがるにつれて女性の割合が顕著に減り絶対数も頭打ちになる。この目に見えない障壁を「ガラスの天井」という。実は、ものわりのよいフェミニストの男性がこのガラスの天井をつくるのに荷担しているかもしれないのである。ものわりのよいフェミニストの男性は、女性に対して無意識にさまざまな配慮をする。その配慮が、かえって女性の将来の可能性を狭めてしまう場合があり得る。また、男性指導者は、男性の後輩に対してだけ社会で生きぬいていくためのアドバイスをする傾向があるそうだ。内永氏は、これを「The good old boy's network」という男性集団にみられる絆として説明した。ほんらい、配慮や指導の基準は、男女それぞれの平均値によるのではなく個人ごとの特性に応じて変わるべきものであり、さらに基準そのものも多様であるべきだろう。真の男女共同参画にむけて、生態学会として何をすべきか。「多様性の尊重」という生態学の基盤のひとつが、男女共同参画にもつながると感じた。

連絡会は2002年10月に自然科学系の学協会が連携して発足し、現在では36の学協会が正式加盟し、26の学協会がオブザーバーとして参加している。これらの学協会に所属する会員の総数は約41万人、そのうち女性会員は約2万人（5%）である。日本生態学会は2003年に連絡会に加盟した。日本森林学会、日本進化学会、日本動物学会も正式加盟学会である。以下、午前中の3つの分科会と午後の全体会について報告する。なお、シンポジウムの詳細な報告は、上記連絡会のウェブサイトで見ることができる（報告者：可知直毅）。

### 分科会 A 「男女共同参画におけるポジティブアクション!？」

ポジティブアクション（以後、PAと略）は「男女共同参画のための積極的改善措置」のことであり、「能力を発揮しにくい環境におかれている女性研究者・技術者がその能力を十分発揮できるように環境を改善する」ことを目的とする。本分科会では、5名の演者から我が国の科学技術分野におけるPAの現状について、国の科学技術政策（塩満）、大学教員の採用現場（有賀・東村）、研究助成機関の立場（島田）、そして国内外のPAの成功事例（都河）に基づいて話題提供があり、その後総合討論が行われた。話題提供内容の重点を以下に列挙する。

- 1) PAには、クォータ制というきわめて厳格なものから、ゴール・アンド・タイムテーブル方式、プラス要素方式、仕事と家庭の両立支援・環境整備などの比較的穏やかなものまで多様な手法がある（塩満）。
- 2) 北海道大学では女性教員増PAの数値目標以上の採用増が実現しているが、今後の「人件費」削減の中で長期的な数値目標達成が困難視されている（有賀）。
- 3) PAのあるべき姿やPAに対する理解をどのように求めるか。PAに対する正しい理解が必須である（東村）。
- 4) JST事業における男女共同参画推進計画における女性比率の向上施策（島田）
- 5) PAの歴史的背景や海外での成功例の紹介。PAの手法を誤ると男性の反発等を招く恐れがある。PAは単に女性を優遇するのではなく、能力を発揮しにくい環境におかれている女性の状況を是正する策の構築が必要である（都河）。

質疑応答と総合討論は活発で、特に総合討論では予定の終了時刻を約15分超過する熱気の入った分科会であった（参加者数は約80名）。その内容を要約すると、「PAとは何か、まずその正しい理解と種類を知ることが必要である」、そしてそれに基づき「PAを正しく理解してもらおう努力が必要であるが、手法を誤ると反発等を招く恐れがある」ことである。生態学会から参加した山本は、自己の経験から「競争的資金の審査等に対してPAとして女性教員比率の数値目標を掲げることについて、場合によっては男女共同参画を妨げる負の側面があることから、一面的ではなく慎重な配慮が必要である」ことを指摘した。この指摘については多くの参加者が同意したようであった。（報告者：山本進一）

### 分科会 B 「次世代の女性研究者育成の取り組み」

少子高齢化、理工学系への進学希望者の減少に伴い、将来、科学技術分野における人材の確保が困難になるとの予測から、次世代の理系人材として女性研究者が期待され始めている。分科会Bでは、応用物理学会の小舘香椎子氏をコーディネーターとして、次世代の女性研究者育成の取り組みに関して4つの講演とそれらに関連した議論が行われた。

まず、中部大学の岡島茂樹氏から「将来の科学技術を支える科学好きの子供を育成するために－初等・中等期の子供に対して何をなすべきか－」というタイトルで、将来の科学技術を担う人材の裾野を広げるために岡島氏や応用物理学会が行っている小中学生とその親を対象とした科学実験教室の取り組みが紹介された。岡島氏は、理科好きの子供を増やすためには家庭の影響が大きいと主張した。そこで、科学理科教室では、子供だけでなく親も一緒に実験等に参加してもらい、実験で生じた子供の疑問に対して家庭に戻ってから一緒に議論できるように工夫しているとのことであった。学校での授業時間には限りがあるが、子供の疑問が授業時間内に必ずしも解決するとは限らない。改めて家庭での役割の大きさを考えさせられた。

次に、日本女子大学の小川賀代氏から「大学における女性研究者・技術者からのマルチキャリアパス支援」というタイトルで、日本女子大学で行われている女性研究者支援のための取り組みが紹介された。中でも小川氏が開発したeポートフォリオシステムという、現役学生が自分の成績や取得資格と卒業生のそれをサイト上で比較し、進路選択に役立てるといった人材育成システムは大変有用であると感じた。女子大においては女性が活躍する多数のロールモデルが存在する、つまり女性研究者を含め様々な職業に実際に就いている人が身近に存在するため、「女性だから〇〇をしない、〇〇できない」、という感覚がなく、将来に対して多様な選択肢があることが当たり前であるという。多くの大学では自分も含め「女性だから…」という考え方を無意識に持っている女子学生も多いのではないかと感じた。このような問題を解消するためにもeポートフォリオシステムの更なる充実と実用化が期待される。

次に、理化学研究所人事部の谷由美氏から「理研の男女共同参画・女性研究者支援～研究も子育ても～」というタイトルで、理化学研究所における女性研究者支援のための取り組みが紹介された。理化学研究所では出産育児の際に、在宅勤務システム、ベビーシッター補助制度等を利用できること、妊娠育児中に自分の代わりに研究を行う代替要員のための費用が助成されるなど、子育てと研究を両立させるための支援策が大変進んでいる。このような支援策が他の研究所、大学に広まっていくことが望まれる。

最後に、名古屋大学の武田譲氏から「ノン・リサーチキャリアパス支援事業」というタイトルで大学等の研究・教育職に就けないポストドク支援のための取り組みが紹介された。大学院重点化によって学位取得者の人数は増加するのに対して、大学教員等のアカデミックポジションは減少している。一方で、ノン・リサーチの分野には多様な職種が存在するため、名古屋大学では産学官連携推進本部室が中心となり研究職以外の分野に就職を希望するポストドクの支援を行っている (<http://www.career-path.jp/index.html>)。私(鈴木)自身がポストドクであるため、正直なところ有り難いような耳が痛いような内容であったが、小川氏の講演でもあったように、将来に対して多様な選択肢を持つという意味でも、ポストドクも前向

きに様々な可能性を探る努力が必要だと感じた。

質疑応答では、講演者による女性研究者の具体例について、予算、法律上の問題に関する議論が活発に行われた。女性研究者育成のためには、母親から子供への教育が重要であり、中学生の時期が科学者を育成するためのキーポイントになることが指摘され、進学後には女子大のような取り組み、就職後には理化学研究所のような取り組み、ポストドクには名古屋大学における取り組みなど、様々な視点からの育成について紹介されたが、これらの取り組みは女性に限らない、男女ともに必要な取り組みであると考えられる。(報告者：鈴木節子・増田理子)

### 分科会 C 「男女共同参画における地域連携・組織連携」

この分科会では、男女共同参画を進める上での地域との連携、および組織内での連携のあり方について5つの大学での事例の報告を受け、それらを軸にして意見交換を行なった。発表の中では、「地域住民などを対象とした啓発・交流」「大学内の育児活動における協同」「キャリアパスへの支援」などについて報告がなされた。また、今回報告がなされた大学の多くは、科学技術振興調整費「女性研究者支援モデル育成」の支援を受けており、それが男女共同参画事業を進める上で大きな支えとなっていることも示された。

地域連携については、地域と様々な結びつきを持つ大学と研究者の連合組織である学会とでは必ず性質が異なっており、紹介された事例には必ずしも学会に当てはまらないと感じるものもあった。しかし、特にキャリアパスに関する大学と大学の外との連携のあり方は、この問題に対する学会の取り組みの参考になるものであった。「キャリアパスを女子学生の問題と結びつけることが、男女共同参画に学生の目を向けさせる上で有効だ」という指摘があり、また、名古屋大学が実施している企業経営者や労組を巻き込んだ連携も、この問題への一つの取り組み方として興味深いものであった。

話題提供後のディスカッションで特に議論になったのは、「男女共同参画」の実現には、女性への支援だけでなく男性への支援も必要だということであった。例えば、上述の科学技術振興調整費では、女性の育児休暇へのサポートは可能であるが男性の同様なサポートは現行では認められない。こうしたあり方は、「男女共同参画」の名のもとに、男女の役割分担の固定化(育児は女性の仕事だという認識)を進めるもので、その精神と逆行するものであるという指摘がなされた。また、男性もメリットを受けられる活動でないと、男女共同参画は広がりを持ってないという意見が出された。「男女共同参画」における男性の位置付けは、今後さらに議論が深められるべき課題であろう。(報告者：山内 淳)

### ポスターセッション

ポスターセッションでは、野依記念学術交流館のロビーを会場として、25の学協会の活動の紹介、振興調整費による「女性研究者育成支援事業」を実施している20の大学・研究機関の取組みの紹介および科学技術振興機構、理化学研究所などの独自の活動の紹介があった。

## 記 事

また、連絡会が主催した 2007 年度「女子高校生夏の学校：科学・技術者のたまごたちへ」について報告があった。生態学会は、残念ながら組織的な取組みはこれからであり、ポスター展示に参加しなかった。また、東北大学が最優秀ポスター賞を受賞した。

### 全体会議

午後の全体会議 1 では、まずこのシンポジウムの幹事学会である応用物理学会の会長美宅成樹氏の挨拶、来賓として内閣府男女共同参画局局長の板東久美子氏の挨拶、名古屋大学総長の平野眞一氏の挨拶があった。特別講演として日本 IBM 株式会社技術顧問の内永ゆか子氏による、「科学技術分野におけるダイバーシティの考え方」が行われた。このなかで、科学技術分野において、女性人材の活用が企業等にとっての利益につながるということが男女共同参画にもつながると言う IBM のマネジメントについて紹介された。この中で、大学でも女性の活用が大学にとってメリットがあることを明確化できれば大学における男女共同参画も発展すると言うことが強調された。

次に、「真の男女共同参画へ向けて意識を変えよう！」と言うパネル討論が行われた。パネリストは来賓、板東久美子氏、東京農工大学学長小畑秀文氏、東北大学総長補佐大隅典子氏、お茶の水女子大学副学長羽生佐和子氏、文部科学省科学技術・学術政策局の山脇良雄氏、特別講演の内永ゆか子氏で、それぞれの大学や、文科省における取組が紹介された。討論では費用対効果検討の必要性、大学として人を育てる環境課における女性支援、ポストク問題を含めた人材育成などが討論され、男女共同参画は女性の問題としてとらえるのではなく、男女を問わず人間の問題としてとらえる必要性についての意見が出された。

全体会 2 では各種報告がなされた。まず、第 2 回大規模アンケート調査の中間報告がされ、現在の集計結果の報告がされた。現在、前回のアンケート調査と異なる点は女性研究者が少ない理由として男性と女性の認識が違ふことが特徴できであるという報告がされた。次に午前中開催の分科会についての報告、連絡会活動報告があった。また、新規加盟学会紹介があり、新たに 5 学会が正式加盟、7 学会がオブザーバー加盟となった。つづいて、ポスター賞授賞式、次期連絡会運営委員長の挨拶があった。その後の懇親会でも名古屋名物の料理が並ぶ中、活発な議論が続いた。このシンポジウムの参加者は 206 名であった（報告者：増田理子／可知直毅）。

### I. 全国委員会承認事項

#### 1. Ecological Research 編集委員（任期 2008.1 ~ 2010.12）

編集委員長	河田 雅圭	
編集幹事	中静 透	占部 城太郎
	佐竹 暁子	
編集委員	江口 和洋	福井 学
	半場 祐子	原 正利
	長谷川雅美	彦坂 幸毅
	日野 輝明	市岡 孝朗
	岩田 智也	梶 光一
	木庭 啓介	久保田康裕
	工藤 岳	久米 篤
	正木 隆	松尾 奈緒子
	宮下 直	仲岡 雅裕
	大園 享司	酒井 章子
	佐藤 一憲	関島 恒夫
	島田 卓哉	陶山 佳久
	高村 典子	瀧本 岳
	Robert Arlinghaus	Syuhei Ban
	Michael Boots	Barry W. Brook
	Min Cao	Jae Chun
	Franck Courchamp	Stuart J Davies
	Angus Davison	Tom J. de Jong
	Jingyun Fang	Raghavendra Gadagkar
	Rhett Harrison	Sun-Kee Hong
	John G. Kie	Andrew Liebhold
	Mathew Leibold	Simon A. Levin
	Mark D. Scheuerell	Janne Sundell
	Simon Thrush	Marinus J.A. Werger
	Ping Xie	Hoi Sen Yong
	David W. Inouye	Erling J. Solberg
	Kari Klunderud	Bas W. Ibelings

#### 2. 次期日本生態誌編集委員（任期 2008.1 ~ 2010.12）

編集委員長	堀 良通	
編集幹事	山村 靖夫	大塚 俊之
	北出 理	
編集委員	井鷲 裕司	市岡 孝朗
	奥田 昇	奥田 敏統
	鎌田 直人	木村 和喜夫
	古賀 庸憲	小林 剛
	近藤 倫生	酒井 聡樹
	鈴木 まほろ	辻 和希
	津田 みどり	中丸 麻由子
	野田 隆史	日浦 勉
	彦坂 幸毅	三浦 徹
	安井 行雄	

#### 3. 学会賞選考委員

委員長	松田 裕之	2006.9 ~ 2009.8
	粕谷 英一	2005.9 ~ 2008.8

工藤 岳	2005.9 ~ 2008.8
東 正剛	2005.9 ~ 2008.8
柴田 鏡江	2006.9 ~ 2009.8
竹中 明夫	2006.9 ~ 2009.8
河田 雅圭	2007.9 ~ 2010.8
齊藤 隆	2007.9 ~ 2010.8
杉本 敦子	2007.9 ~ 2010.8

\*学会賞細則変更のため一昨年・昨年選出委員の1年の任期延長が全国委員会で承認された。

## II. 書評依頼図書 (2007年5月~2007年10月)

現在、下記の図書が書評依頼図書として学会事務局に届けられています。書評の執筆を希望される方には該当図書を差し上げます。ハガキ又はEメールで、ご所属・氏名・住所・書名を学会事務局 (office@mail.esj.ne.jp) までお知らせ下さい。なお、書評は1年以内に掲載されるようご準備下さい。

1. 日本ペドロロジー学会編「土壌を愛し、土壌を守る」(2007) 396pp. 博友社 ISBN:978-4-8268-0205-5
2. 兵庫県生物学会編「兵庫の自然今昔」(2007) 128pp. 兵庫県生物学会 ISBN:978-4-343-00417-8
3. 金谷整一・吉丸博志編「屋久島の森のすがた『生命の島』の森林生態学」(2007) 248pp. 文一総合出版 ISBN:978-4-8299-0176-2
4. 八尋克郎・榊永一宏編『『昆虫記』刊行100年記念日仏共同企画フェアブルにまなぶ』(2007) 152pp. 日仏共同企画「フェアブルにまなぶ」展実行委員会
5. 京都大学総合博物館・京都大学生態学研究センター編「生物多様性ってなんだろう生命のジグソーパズル」(2007) 314pp. 京都大学学術出版会 ISBN:978-4-87698-827-3
6. 西田利貞著「人間性はどこから来たのかサル学からのアプローチ」(2007) 364pp. 京都大学学術出版会 ISBN:978-4-87698-826-6
7. M.L. モリソン著 梶光一・神崎伸夫監修「生息地復元のための野生動物学」(2007) 138pp. 朝倉書店 ISBN:978-4-254-18029

## III. 寄贈図書

1. 「多摩川 第115号」(2007) 8pp. (財)とうきゅう環境浄化財団
2. 「東レ科学振興会 第47回 事業報告書」(2007) 164pp. (財)日本学術協力財団
3. 「東京大学海洋研究所 ニュースレター (5冊)」(2005-2007) 東京大学海洋研究所
4. 「果樹研究所ニュース19号」(2007) 8pp. (独)農業・食品産業技術総合研究機構
5. 「DNA マーカーによる果樹・果実の品種判別」(2006) 7pp. (独)農業・食品産業技術総合研究機構
6. 「SESSILE ORGANISMS」(2007) 190pp. 日本付着生物学会
7. 「食と緑の科学61」(2007) 118pp. 千葉大学園芸学部
8. 「沖縄植物図譜」(2007) 636pp. (財)海洋博覧会記

念公園管理財団

9. 「うみうし通信 No.56」(2007) 12pp. (財)水産無脊椎動物研究所
10. 「スポーツの科学」(2007) 232pp. (財)日本学術協力財団

## IV. 後援・協賛

日本生態学会では、下記のシンポジウム・セミナーを後援・協賛しました。

1. 「女子高校生夏の学校 ~科学・技術者のたまごたちへ~」

主催：文部科学省

独立行政法人 国立女性教育会館

男女共同参画学協会連絡会

日本学術会議 科学と社会委員会 学力増進分科会

日時：平成19年8月16日(木)~8月18日(土)

場所：独立行政法人 国立女性教育会館

2. 「2007年コスモス国際賞受賞記念講演及び第15回記念シンポジウム」

主催：財団法人花と緑の博覧会記念協会

開催期間及び開催場所：

平成19年10月2日(火) 京都大学

平成19年10月6日(土) TOKYO FM HALL

3. 国際シンポジウム

「生態環境リスクマネジメントにおける空間情報基盤の役割」

主催：横浜国立大学グローバルCOEプログラム「アジア支店の国際生態リスクマネジメント」・神奈川拡大流域圏空間情報プラットフォーム研究会・横浜国立大学教育研究高度化経費プロジェクト「GIS(地理情報システム)を基盤とした文理融合型の地域研究教育拠点形成・そのII」プロジェクトチーム

日時：2007年10月20日(土) 13:00~17:30

場所：横浜国立大学教育文化ホール

4. シンポジウム「美しい日本の自然」

主催：環境省

開催日時：平成19年10月13日(土)

会場：消防会館ニッショーホール

5. 「第1回小・中学校における生態園づくり事例発表会」

主催：毎日新聞大阪本社・財団法人国際花と緑の博覧会協会

日時：平成19年11月10日(土) 14:00~17:00

場所：大阪市立青少年文化創造ステーション

## V. 地区会活動報告 (2006年度)

北海道地区会 (2006年9月1日 - 2007年8月31日)

- (1) 2006年度役員会を開催した。

開催日：2007年2月25日(日)

場所：江別市、酪農学園大学

出席者：佐藤謙・紺野康夫・揚妻直樹・村上正志・野田隆史

議題

1. 本年度活動報告
2. 会計報告
3. 来年度活動予定（地区大会）
4. その他

以上の件について審議の上、了承された。

(2) 2006 年度 地区大会・総会を開催した。

開催日：2007 年 2 月 25 日（日）

場 所：江別市、酪農学園大学

【若手研究発表】

「釧路湿原広里地区におけるハンノキ実生の生育立地」志田祐一郎・中村太士（北海道大学大学院 農学研究院）

「一回繁殖型高山植物ミヤマリンドウの成長様式：生育期間の変動がもたらす影響」川合由加（北海道大学大学院 環境科学院）

「キイロシヨウジョウバエにおける低温及び高温麻痺からの回復時間に対する選択」森信人（北海道大学大学院 環境科学院）

「シヨウジョウバエの抵抗性と寄生蜂の寄生能力の共進化」及川綾子（北海道大学大学院 環境科学院）

「北海道におけるキタキツネ・ロードキルの発生状況に関する空間解析」勝又聖乃（北海道大学 農学部）・鈴木透（EnVision）・中村太士（北海道大学 農学研究科）・金子正美（酪農学園大学環境システム学部）・野呂美紗子（（社）北海道開発技術センター）

「北海道におけるカラスのロードキルの発生傾向と空間解析」鏡味里江（酪農学園大学 環境システム学部）・野呂美紗子（（社）北海道開発技術センター）・金子正美（酪農学園大学 環境システム学部）

「エゾシカによる餌と餌場の選択」後藤康一（北海道大学大学院 環境科学院）

「石狩川におけるカワヤツメ幼生の生息条件」白川北斗・柳井清治（北海道工業大学 工学部）

「潮間帯岩礁域における底生動物の群集構造と環境要因に関する研究」川戸奈見子・南秀樹・斎藤裕美（北海道東海大学 工学部）

「北海道における土壌-大気間の温室効果ガスのフラックスとそれに関わる微生物の群集構造」堤正純・小島久弥（北海道大学 低温研）・植村滋（北海道大学 北方生物圏フィールド科学センター）・山田雅仁・隅田明洋・原登志彦・福井学（北海道大学低温研）

「トガリネズミの土壌生態系における役割」南波興之（北海道大学大学院 環境科学院）・大館智氏（北海道大学 低温科学研究所）

とそのメカニズム」宮崎玄・岸田治（北海道大学大学院 水産科学院）・西村欣也（北海道大学大学院 水産科学研究所）

「エゾサンショウウオ幼生の外鰓の発達：複数の誘導形質間の機能的関係」岩見斉・岸田治（北海道大学大学院 水産科学院）・西村欣也（北海道大学大学院 水産科学研究所）

「エゾサンショウウオ幼生の外鰓の発達：複数の誘導形質間の機能的関係」岩見斉・岸田治（北海道大学大学院 水産科学院）・西村欣也（北海道大学大学院 水産科学研究所）

「捕食者-被食者系でみられる適応的な形態誘導：エゾサンショウウオ幼生とエゾアカガエル幼生の形態変化をモデルとして」岸田治・岩見斉・宮崎玄・井川拓也（北海道大学大学院 水産科学院）・菅原菜穂（北海道大学 水産学部）・西村欣也（北海道大学大学院 水産科学研究所）

「北海道厚岸湖に生育する海草-アマモ *Zostera marina* 一の窒素収支」長谷川夏樹・葛西広海（北水研）・向井宏（北海道大学 北方生物圏フィールド科学センター）・田中義幸・宮島利宏・小池勲夫（東京大学 海洋研究所）

「水辺林樹種間における過湿ストレス耐性の比較」牛塚朝子・北原曜・小野裕（信州大学 農学部）・矢島崇（北海道大学 農学研究科）

【総会】

議題

1. 本年度活動報告
2. 会計報告
3. 来年度活動予定
4. 選挙について

5. 自然保護委員会主催による「「幹線林道平取・えりも線の中止要望書」バックアップ企画」への地区会からの援助について承認

6. 文部科学省科学技術振興調整費（戦略的研究拠点育成）プロジェクト、北海道大学サステナビリティ・ガバナンス・プロジェクト（SGP）、および第 23 回個体群生態学会シンポジウム実行委員会主催による「個体群生態学会シンポジウム：生態システムの持続性と空間構造」の後援について承認

(3) 「幹線林道平取・えりも線の中止要望書」バックアップ企画

開催日：2006 年 2 月 19 日（日）

場 所：様似町、えりも町・幹線林道平取・えりも線建設現場

生態学会北海道地区会の活動として、「幹線林道平取・えりも線の中止要望書」バックアップ企画を、2007 年 6 月 23、24 日におこなった。

生態学会北海道地区会・自然保護専門委員会では、

2005年に「緑資源幹線林道、平取・えりも線「様似・えりも区間」の工事中止を求める要望書」を林野庁長官、緑資源機構理事長、北海道知事宛に提出した。今回、そのバックアップ企画として、未だに「建設途中」である、当該林道の現状の視察を行った。

北海道地区会・自然保護専門委員会委員の佐藤謙氏、紺野康夫氏の他、地区会員、6名の参加があり、6月23日(土)には、様似側の林道(オピラカオマップ沢)を視察した。現場に緑資源機構、札幌事務所の職員3名が、来られ、説明いただいた。計画の進捗状況、生態系への配慮などについて、質疑応答が行われた。6月24日(日)には、えりも側の既存の林道(猿留川流域)から、建設現場を視察、さらに、建設予定の場所を視察した。佐藤氏から、ナキウサギの生息地、蛇紋岩植生など、希少な自然が残された場所を紹介いただいた。

## 東北地区会

(1) 東北地区会第51回大会を開催

開催日：2006年11月25・26日

会場：山形大学理学部

公開シンポジウム(11月25日)

「ヒトとサルとクマとシカ 共生のありかたを考える」

- 1) 趣旨説明 玉手英利(山形大学理学部)
- 2) 「私たちと里山、里山の中の野生生物」白壁洋子(NPO 森の仲間たち代表)
- 3) 「撤退のシナリオ：持続的資源利用と地域個体群保全型狩猟に向けて」田口洋美(東北芸術工科大学教授、マタギ文化論)
- 4) 「宮城県のニホンザル」宇野壮春(宮城のサル調査会)
- 5) 総合討論

一般講演(11月26日)

「磐梯山の泥流上におけるアカマツ林の遷移過程—木本の実生・若木20年の推移—」○嵐田達也(山形大・院・理工)・宮内峰彦・秋生光行・辻村東國(山形大・理・生物)

「宮古市十二神山に発達する落葉広葉樹林の林分構造」○櫻井悠・竹原明秀(岩手大・院・人文社会)

「早池峰山のコメツガ・オオシラビソ林における実生の発生と消失(1997～2006)—マイクロサイトによる消失過程のちがいを—」○杉田久志(森林総合研究所東北支所)・高橋利彦(木工舎「ゆい」)

「東北3山岳におけるハイマツ伸長量と温度の関係」○酒井大輔(秋田大学・院・教育)

「早池峰山に生育するアカエゾマツ集団の交配パターン」○富田基史・陶山佳久(東北大・院・農)・関剛・杉田久志(森林総研・東北)

「大面積調査地におけるブナ個体群の遺伝構造」○沼野直人・陶山佳久(東北大・院・農)

「ブナ植林に使用された種苗の分子系統地理学的由来とその生育実態」○菅野学・陶山佳久(東北大・院・農)・原正利(千葉中央博)・高橋誠・渡邊敦史(林育種センター)・清和研二(東北大・院・農)

「火入れ頻度の減少に伴うヨシ(*Phragmites australis*

*Trin.*)群落の変化」○谷口哲郎・杉浦俊弘(北里大・獣医畜産)・齋藤宗勝(盛岡大・短期大学部)・馬場光久・小林裕志(北里大・獣医畜産)

「トチノキ種子に含まれる二次代謝物質エスシン濃度のばらつきとアカネズミによる選択的な摂食」○山元得江・星崎和彦・吉澤結子(秋田県立大・生資)・木村靖夫(鳥取大・農)・小林一三(秋田県立大・生資)

「セイヨウオオマルハナバチの野生化とそれに伴う在来生態系への影響」○横山潤(東北大・院・生命科学)「ニホンヤマネ *Glirulus Japonicus* の巣箱選好性と生息環境の解明」○中村夢奈(山形大・院・理工)

「安定同位体比を用いた泥干潟に生息する堆積物食マクロベントスの餌資源解析」○金谷弦・高木茂人・菊地永祐(東北大・東北アジア研究センター)

「蔵王芝草平のユスリカ幼虫群集に及ぼすヤンマ類ヤゴの影響」○富樫博幸・鈴木孝男・占部城太郎(東北大・院・生命科学)

「性特異的な分散距離の進化 Episode 4 近交弱勢と性比のゆらぎ」○廣田忠雄(山形・理・生物)

(2) 地区委員会

2006年度定例地区委員会は、2006年11月25日に山形大学理学部において開催され、以下の議題について報告および審議がなされた。出席者は以下の14名であった。蒔田明史、竹原明秀、関剛、松政正俊、占部城太郎、鈴木孝男、清和研二、中静透、彦坂幸毅(兼庶務幹事)、平吹喜彦、玉手英利、辻村東國、浅見和弘、太田宏(会計幹事)

○報告事項

・庶務報告(2006年1月1日～2006年11月25日)

1) 2006年1月31日：日本生態学会東北地区会会報第66号を発行した。

2) 2006年7月22日に締切られた地区委員選挙の結果、以下の22名が選出された(任期：2006年8月1日～2008年7月31日)。

青森県：東信行、佐原雄二、武田哲、

次点：杉山修一

秋田県：成田憲二、蒔田明史、次点：星崎和彦

岩手県：竹原明秀、関剛、牧陽之助、松政正俊、

次点：杉田久志

宮城県：占部城太郎、河田雅圭、鈴木孝男、

清和研二、中静透、彦坂幸毅、平吹喜彦、

次点：菊地永祐

山形県：玉手英利、辻村東國、安田弘法、

次点：林田光祐

福島県：浅見和弘、木村勝彦、黒沢高秀、

次点：木村吉幸

3) 2006年9月14日：地区委員の互選の結果、地区委員長に中静透が選出された。

4) 2006年10月5日：地区会事務局は中静透地区委員長の委嘱により、庶務幹事を彦坂幸毅(東北大学)、会計幹事を太田宏(東北大学)が引き受けることになった。

5) 2006年10月：第51回地区大会及び総会の案内を送付した(山形県)。

- 6) 2006年11月：第51回地区大会プログラムを発送した(山形県)。
- 7) 2005年11月25日：山形大学理学部において、地区委員会を開催した。
- 8) 2005年11月25、26日の両日にわたって、山形大学理学部において第51回地区大会及び総会を開催した。

・会計報告

2005年度決算報告とその会計監査報告、2006年度中間報告ならびに今後の執行見込みについて報告があり、了承された。

○審議事項

・2007年度予算

2007年度予算案について説明があった。地区大会運営関連の支出費目名について変更案が出され、予算案とともに承認された。

・会計監事

2006年度会計監査のための会計監事に菊池永祐東北大学教授が推薦され、承認された。

・次回地区大会開催地

次回地区大会を福島県が引き受ける旨の説明があり、これを承認した。

・次々回地区大会開催地

2009年に東北地区で開かれる予定の全国大会の開催地が決定されてから議論すべきとの意見があり、先送りすることが了承された。

・2009年生態学会全国大会の開催地について

2009年に東北地区で開かれる予定の全国大会の開催地の決定について議論したが、結論は出ず、各県で開催の可能性について検討することになった(後のメール会議で、盛岡市周辺で行われることが決定した)。

(3) 総会

2006年度東北地区総会は、2006年11月26日に山形大学理学部において開催され、総会議長に玉手英利氏を選出し、以下の議題について報告および審議がなされた。

- ・地区委員会における庶務報告・会計報告が了承された。
- ・2007年度予算案が原案の通り承認された。
- ・次回地区大会を福島県で開催することが承認された。
- ・次々回大会および2009年全国大会の開催地が未定であることが報告された。

**関東地区会**

2006年(1月～12月)活動報告

- (1) 2006年1月より地区委員会事務局および役員が以下に引き継がれた。

事務局：独立行政法人海洋研究開発機構 地球環境フロンティア研究センター

地区会長：和田英太郎、庶務幹事：石井勲一郎、会計幹事：加藤知道

- (2) 地区総会およびシンポジウムの企画を立案

「陸域生態系観測の現在と未来」

(12月3日に開催を予定したが事情により2007年2月18日に延期)

- (3) 地区例会として修士論文発表会を2006年3月5日

横浜国立大学教育人間科学部にて開催した。

「富士北麓に生息するニホンリスのアカマツ種子への依存性」相京千香(農工大・農・森林生物保全学研究室)  
「北海道マイマイガにおける遺伝子浸透のコンピューター・シミュレーション」五十嵐章裕(東京薬科大・生命科学・生態学研究室)

「GISを用いた現存植生図解析による都市近郊地域の植生変化—東京都府中市と千葉県我孫子市を例として—」内山翼(農工大・植生管理学研究室)

「関東周辺のTuber属菌の形態的特徴と生育地環境」大久保彦(筑波大・環境科学)

「都市近郊の水草—分布と生物群集への貢献—」大槻真紀(横国大・環境情報・環境生命・生態学研究室)

「アマズネザサの除去がタマノカンアオイの結果率に及ぼす影響」大西和樹(東京薬科大・生命科学・生態学研究室)

「小櫃川河口塩湿地における植生分布とその決定要因」小田倉碧(茨城大・理工)

「都市河川に生息するミクリ(Sparganium erectum)群落の季節特性および流れ場の応答」小池直行(埼玉大・理工・応用生態工学研究室)

「西表島における溪流辺植物群落の種組成と立地特性に関する研究」齊藤みづほ(農工大・植生管理学研究室)

「理想自由分布を達成するヨツモンマメゾウムシの意思決定過程」瀬戸山雅人(東大・総合文化・広域システム)

「白粒葉枯病菌の分類とその感染経路」高橋由紀子(東大・農・森林科学・森林植物学研究室)

「岩礁潮間帯における機能群構造と群集動態の空間スケール依存性」辻野昌広(千葉大・自然科学)

「樹木の葉の形態形成に対するシカによる採食の影響」津金麻由美(東大・新領域・環境学・自然環境・生物圏機能)

「アリの社会寄生に関する研究 サムライアリの室内環境における社会寄生行動の再現」恒岡洋右(早稲田大・理工・生命理工)

「アミメアリ *Pristomyrmex punctatus* における社会構造と利己者・利他者の進化動態」土畑重人(東大・総合文化・広域システム)

「フクロウ *Strix uralensis* の巣内残存物によるヒナへの給餌内容の検証」富安大貴(早稲田大・理工・生命理工)

「玉原高原におけるブナ林復元のための基礎的研究」仲陽子(農工大・植生管理学研究室)

「ミヤコグサ野生系統における成長特性の系統間変異とその生態学的意義」中田望(都立大・理・生物・植物生態学研究室)

「温泉水中の微生物群集における太古代からの硫黄循環」長谷祐美子(都立大・理・生物・環境微生物学研究室)

「東京都八王子市多摩森林科学園におけるシジュウカラおよびヤマガラノ遺伝マーカーを用いた婚外交尾に関する研究」原田幸子(都立大・理・生物・動物生態学研究室)

「都市公園の森林における鳥類相に影響を与える要因

の解明」眞塩智野（横国大・環境情報・環境生命）  
「伊豆諸島及び関東地方南部における動物付着散布植物の生態分布と形態的特性」水島亮子（農工大・植生管理学研究室）

「アオキ *Aucuba japonica* Thunb. の葉緑体 DNA 多型の解析からみた緑化植物の流通の現状」矢野初美（東大・農・緑地創成学研究室）

「乗鞍岳西麓の溶岩流上における亜高山性および山地性針葉樹林の分布特性」山本哲朗（横国大・環境情報）

「ニホンウサギコウモリ (*Plecotus auritus sacrimontis*) における分子生態学的研究」吉倉智子（日大・応用生命・野生動物学研究室）

(4) 2006 年度中に予定されていた地区会総会、シンポジウムの開催は 2007 年 2 月に延期された。

(5) 地区会報第 55 号の出版も 2007 年に延期された。

## 中部地区会

### 2007 年度地区会大会

日 時：平成 19 年 6 月 23 日（土）・24 日（日）

場 所：飯田市美術博物館

招待講演 テーマ「ハナノキ湿地の保全と生態研究」  
「絶滅危惧植物ハナノキの生態と保全手法の考察」  
佐伯いく代（首都大東京・牧野標本館）  
「市民によるハナノキ湿地の保全活動—過去そして今—」北沢あさ子（はなのき友の会）・蛭間啓（飯田市美術博物館）

### 一般講演

「伊那盆地におけるダルマガエルの移動性」水野敦（信州大・院・農）・大窪久美子（信州大・農）・澤島拓夫（当間高原リゾート）

「長野県中南部のため池における水生植物の組成と環境条件の関係」大窪久美子（信州大・農）・福島敬彦（信州大・院・農学研究科）

「恵那市飯地町におけるハナノキの立地と更新特性」  
広木詔三（名古屋大・情報科学）・後藤稔治（瑞浪市立陶中）

「愛知県瀬戸市「海上の森」の湧水湿地における地形と植生配置」富田啓介（名古屋大・院・環境）

「黒河湿地（渥美半島）の植生とその変化」中西正（愛知県立成章高等学校）

「山梨のシダ植物分布特異性について周辺五県との比較」松浦亮介・佐藤利幸（信州大・理）

「ウリハダカエデの個体内種子変異～生態学的な意味について～」片桐知之・佐藤利幸（信州大・理）

「個体群動態モデルによるカミツキガメ個体群の根絶可能性」小林頼太<sup>1</sup>・長谷川雅美<sup>2</sup>・宮下直<sup>1</sup>（<sup>1</sup>東大・農・生物多様性、<sup>2</sup>東邦大・理・生物）

「所変われば宿主も変わる—盗み寄生者チリイソウロウグモの形質分化機構の解明—」馬場友希・宮下直（東大院・農・生物多様性科学）

「エンドファイト感染個体と未感染の共存—同種内での共存と植食者の影響に注目して—」岩田繁英・竹内康博（静岡大学・創造科学技術）

「房総半島のシカ個体群の妊娠率に関わる環境要因」

宮下直・鈴木牧・安藤大介（東大・農・生物多様性）・落合啓二・浅田正彦（千葉県立中央博）

「長野県中・北部における 1998 年から 2006 年のブナ種子生産量」井田秀行（信州大・教育・志賀自然教育園）

日本生態学会中部地区会総会

6 月 24 日（日）

エクスカージョン（飯田市内：ハナノキ湿地）

## 近畿地区会

(1) 2007 年度第 1 回地区委員会の開催

日 時：2007 年 6 月 23 日

会 場：総合地球環境学研究所

出席者：湯本貴和、伊藤明、堀道雄、佐藤弘明、野間直彦、角野康郎、工藤洋、丑丸敦

### 議事

(1) 2006 年度の活動報告、(2) 地区会員へのメール連絡実施についての報告があり、今後も継続することとした、(3) フィールドシンポジウムの開催について

(2) 2007 年度第 1 回例会の開催

日 時：2007 年 6 月 23 日

会 場：総合地球環境学研究所

### プログラム

#### ○一般講演の部

1) 坂戸克匡・近藤倫生（龍谷大学・理工学部）「食物網におけるネスト構造とその成立メカニズム」

2) 鈴木亮（奈良女子大学・共生科学研究センター）「植物の対捕食者戦略としての矮小形態—奈良公園を例に—」

3) 鎌倉真依（奈良女子大・人間文化）、古川昭雄（奈良女子大・共生科学研究センター）「葉内 CO<sub>2</sub> 濃度に対する気孔の応答とその種間差」

#### ○ミニシンポジウム「深泥池の現在」

1) 辻野亮（総合地球環境学研究所）「深泥池における植生の変化」

2) 松井淳（奈良教育大学）「外来植物・希少植物の分布と変化」

3) 安部倉完（京都大学大学院理学研究科・動物生態研究室）「根絶に向けての外來魚種除去の取り組み」

4) 加藤義和（京都大学大学院理学研究科・動物生態研究室）「深泥池の浮島に棲む底生動物の特徴」

5) 竹門康弘（京都大学防災研究所）、松井淳：まとめと質疑応答

第 4 回日本生態学会近畿地区会奨励賞には、鎌倉真衣さんと安部倉完さんの発表が選定された。

## 中国四国地区会

第 51 回中国四国地区大会（2007 年 5 月 19、20 日、於：鳥取大学）

1) ポスター発表（5 月 19 日）

「ヨコヤアナジャコに付着共生する二枚貝マゴコロガイの採餌生態」○伊谷行、吉田侑祐（高知大学・教育学部）

「北海道におけるマザトウムシ *Phalangium opilio* の分布拡大と雄の2型」○竹中宏二、鶴崎展巨（鳥取大・地域・地域環境・生物）

「兵庫県とその周辺におけるザトウムシ3種の核型分化と交雑帯」○鶴崎展巨、谷口強、去来川園子（鳥取大学地域学部生物）

「瀬戸内海におけるナルトビエイの出現状況と食性」吉田太輔<sup>1</sup>、泥谷明子<sup>2</sup>、坂井陽一<sup>2</sup>、○橋本博明<sup>2</sup>（広島大学・<sup>1</sup>生物生産学部、<sup>2</sup>院生物圏科学研究科・水圏資源生物）

「水鳥による池沼への栄養塩負荷量の算定」○中村雅子<sup>1</sup>、牛山克巳<sup>2</sup>、江面康子<sup>3</sup>、田尻浩伸<sup>3</sup>、岡田貴行<sup>4</sup>、松田賢二<sup>4</sup>、神谷要<sup>5</sup>、嶋田哲郎<sup>6</sup>、相崎守弘<sup>1</sup>（<sup>1</sup>鳥根大・生物資源、<sup>2</sup>北海道美瑛市、<sup>3</sup>（財）日本野鳥の会、<sup>4</sup>国交省・関東地方整備局、<sup>5</sup>（財）中海水鳥国際交流基金財団、<sup>6</sup>（財）宮城県伊豆沼・内沼環境保全財団）

「見逃されてきた酸性雨の植物影響：オオバコの成長が液相オキシダントの下で維持される機構」鬼頭量平<sup>1</sup>、○小林剛<sup>1</sup>、中谷暢丈<sup>2</sup>（<sup>1</sup>香大・農、<sup>2</sup>広大院・生物圏）

「森林の竹林化における根系土壌緊縛力の低下」○皮玲、中根周歩（広島大学・生物圏科学研究科）

「アカメガシワとアリの相互関係」○山尾僚<sup>1</sup>、波田善夫<sup>2</sup>（<sup>1</sup>岡山理科大学・総情・生地、<sup>2</sup>岡山理科大学・総情・生地）

「コナラの種子と野ネズミの関係」○矢野舞依子<sup>1</sup>、佐野淳之<sup>2</sup>（<sup>1</sup>鳥取大・院・森林生態系管理学、<sup>2</sup>鳥取大・農・FSC）

「コナラのシュート構造」○今田早織<sup>1</sup>、佐野淳之<sup>2</sup>（<sup>1</sup>鳥取大・院・森林生態系管理学、<sup>2</sup>鳥取大・農・FSC）

「植生調査により推定したコナラ芽生えの生育可能な植生」○中田将人<sup>1</sup>、波田善夫<sup>2</sup>（<sup>1</sup>岡山理科大学・総情・生地、<sup>2</sup>岡山理科大学・総情・生地）

「高知県の中山間地における放棄棚田の復田による植生変化：いの町成山地区の事例」○兼田侑也、石川慎吾、三宅尚（高知大・院・理・自然環境）

「岡山県前島の植生」○松岡憲吾<sup>1</sup>、財津一行<sup>2</sup>、太田謙<sup>3</sup>、波田善夫<sup>2</sup>（<sup>1</sup>岡山理科大学・総情・生地、<sup>2</sup>岡山理科大学・総情・生地、<sup>3</sup>岡山理科大学・総情・数環）

「千代川河川敷植生の構造」○三谷真耶、福本愛弓、長尾明美、永松大（鳥取大・地域・地域環境・生物）

## 2) 口頭発表（5月20日）

「鳥取県内でのツボミオオバコの分布拡大と繁殖戦略の観察」清末幸久（鳥取県立博物館）

「チヂレゴケの極限環境耐性」○進藤明彦<sup>1</sup>、松島康<sup>1</sup>、小野文久<sup>1</sup>、西村直樹<sup>2</sup>、西平直美<sup>3</sup>、三枝誠行<sup>1</sup>（<sup>1</sup>岡山大学大学院自然科学研究科、<sup>2</sup>岡山理科大学大学院総合情報研究科、<sup>3</sup>岡山コケの会）

「有効容水量の新しい求め方と森林の植生と管理の違いが有効容水量に及ぼす影響」○金行悦子、中根周歩（広島大学大学院・生物圏科学研究科）

「竹炭を用いた薄層屋上緑化における熱収支と水循環機能の蘇生」河村求<sup>1</sup>、○中根周歩<sup>2</sup>（<sup>1</sup>広島大学・総合科学部、<sup>2</sup>広島大学・生物圏科学研究科）

reticulatus)の成長と発育に関する研究」○越智雄一郎、福井行雄、橋本博明、坂井陽一（広島大学大学院・生物圏科学研究科）

「瀬戸内海中西部域におけるイイダコ *Octopus ocellatus* の資源生態」黒崎宏基<sup>1</sup>、坂井陽一<sup>2</sup>、○橋本博明<sup>2</sup>（広島大学・<sup>1</sup>生物生産学部、<sup>2</sup>院生物圏科学研究科・水圏資源生物）

「瀬戸内海におけるテナガダコ (*Octopus minor*) の資源生態学的研究」○東出遼介、坂井陽一、橋本博明（広島大学・生物圏科学研究科）

「大橋川におけるヤマトシジミとホトトギスガイの個体群動態—2006年夏の出水の影響」○倉田健悟<sup>1</sup>、平塚純一<sup>2</sup>（<sup>1</sup>鳥根大学汽水域研究センター、<sup>2</sup>鳥根野生生物研究会）

「鳥取市平野部河川敷に生息するアカハライモリ集団で確認された遺伝的多様性の減少とその保全」○小林朋道、山下裕介（鳥取環境大学・環境情報学部・環境政策学科）

「枯死木に発生する変形菌の樹種選好性」○高橋和成<sup>1</sup>、波田善夫<sup>2</sup>（<sup>1</sup>岡山理科大学・総情、<sup>2</sup>岡山理大）

「鳥取砂丘39年間の植生変化」○永松大、富永彩恵（鳥取大学・地域学部・地域環境）

「トキワサンザシ・タチバナモドキの生態学的特性と河川における分布拡大の可能性」宮口佑司、○石川慎吾、三宅尚（高知大・理）

「長崎県唐比湿原堆積物の花粉分析学的研究」○竹内徹<sup>1</sup>、三好教夫<sup>1</sup>、畑中健一<sup>2</sup>、北岡豪一<sup>1</sup>（<sup>1</sup>岡山理大・院・材質理、<sup>2</sup>北九州大名誉教授）

## 3) 公開シンポジウム（5月19日）

「遺伝子からみた生物の分布と保全—ブナ・コナラの仲間とブナ林にすむ動物の遺伝的分化と保全—（世話人：佐野淳之・永松大）」

「遺伝子からみた東アジアのナラ類の変遷と環境適応」原田光（愛媛大学農学部森林資源生物研究室）

「西日本におけるブナ集団の分布パターン、遺伝的多様性、保全のあり方」戸丸信弘（名古屋大学農学部生命農学研究科）

「ブナ林をめぐるザトウムシのチェッカー盤型分布、地理的分化と染色体交雑帯」鶴崎展巨（鳥取大学地域学部生物研究室）

## 4) 総会

### a. 報告事項

#### 庶務報告

地区会員の状況（2007年4月末現在323名、昨年度+25名）、会費納入率、活動報告

#### 会計報告 2006年度会計

中四国地区提出要望書（細見谷林道工事、上関原発）、アフターケア委員会報告

#### 地区会報 No.60 の発行報告

#### 各種委員会報告

### b. 承認事項

#### 2006年度会計決算

2008年度合同支部大会開催地：広島大学

細見谷林道工事に係わる地区会要望書

細見谷アフターケアー委員長の交代 豊原源太郎氏から金井塚務氏へ交代

c. 審議事項

2007 年度会計予算

2009 年度合同支部大会開催地：高知

九州地区会

(1) 地区委員会

日 時：2006 年 5 月 20 日（土）

会 場：鹿児島大学理学部（郡元キャンパス）

地区委員 矢原徹一・江口和洋・粕谷英一・鈴木英治・高宮正之・馬場稔・真鍋徹・森敬介・山本智子

(2) 地区大会

第 51 回三学会九州支部・地区合同大会

会 期：平成 18 年（2006 年）5 月 20 日（土）～ 21 日（日）

会 場：鹿児島大学理学部（郡元キャンパス）

【一般講演】（\*は発表者）

「住民参加による生態系保全を目的とした小型魚道の開発と実証」\*大平裕（九州大学大学院生物資源環境科学府）・中野芳輔（九州大学大学院農学研究院）

「キビナゴの産卵様式」\*櫻井真（鹿児島純心短大）・四宮明彦（鹿大水）・出羽慎一（ダイビングサービス海案内）

「死んだ鯨に集う生物たち～鯨骨生物群集の遷移～」\*山本智子（鹿大・水産）・藤原義弘（JAMSTEC）・窪川かおる（東大・海洋研）・塚原潤三（鹿大・理）

「鹿児島県野間池定置網におけるアオウミガメの混獲調査について」武内有加（鹿大・理工・地環）

「フトヘナタリの木登り行動と繁殖行動」\*鈴鹿達二郎・富山清升（鹿大・理工・地球環境）

「陸産貝類における Captive breeding と産卵誘発について」\*小長井利彦（鹿児島大学理工学研究科地球環境科学専攻）・村上篤司（富士常葉大学環境防災学部防災学科）

「奄美諸島におけるクロボシセセリの分布と寄生者の影響」金井賢一（県立大島高校 理科教諭）

「北九州市における絶滅危惧水草ガシャモク個体群の近年の推移」\*真鍋徹（北九州自・歴博）・須田隆一（福岡県保環研）・清水敬司（三洋コンサルタント）・大野睦子（水草研究会）・山田裕美（北九州市環境局）

「栽培ダイコンの遺伝的多様性：特に鹿児島と沖縄のシマダイコン類について」\*西脇亜也・松石正徳・長谷川貴治・安藤定美（宮崎大・農）

「イエコウモリ *Pistrellus abramus* におけるナイトルーストの利用について」\*船越公威・片平理絵・池田宏美（鹿児島国際大・国際文化・生物）

「半野生状態でのニホンイノシシの活動パターン」高橋惟真（九大・理・生物）・\*江口和洋（九大院・理・生物）・仲谷淳（近畿中国四国農業研究センター）

「熊本県におけるイタチ属 2 種の同定と分布の現状」\*荒井秋晴（九歯大・総合教育）・中園敏之（九州自然環境研究所）・坂田拓司（熊本市立千原台高等学校）・田悟和巳・中村匡聡（国土環境）

「慶良間諸島に生息するケラマジカの現状」\*遠藤晃（佐賀大・農）・比嘉憲之朗・上原穂野香・中村光志・糸嶺彩華・上原由紀子（座間味村立慶留間小学校）

「北九州の都市近郊緑地公園における哺乳類相」馬場稔（北九州自然史・歴史博）

「ニホンイシガメの季節的移動」\*吉田麻弥・江口和洋（九大・理・生物）

「アマゾン川氾濫域におけるワニの巣の自動撮影によるモニタリング」\*矢部恒晶（森林総研・九州）、Ronis da Silveira（ブラジル国立アマゾン研究所）

【特別講演】

「フェニックスの大量枯損の発生とその犯人」曾根晃一（鹿児島大学農学部生物環境学科森林保護学研究室）

(3) 地区例会

第 442 回 4 月 22 日（土）熊本（熊本県立大学）

「有明海の干潟域におけるアサリ (*Ruditapes philippinarum*) の個体群動態と個体群維持機構」佃政則・堤裕昭（熊本県立大学・環境共生学研究科）

第 443 回 5 月 13 日（土）沖縄（琉球大学）

「沖縄県版レッドデータブックの現状と課題」佐々木健志 [琉球大学資料館（風樹館）]

第 444 回 7 月 8 日（土）鹿児島（鹿児島大学）

「林の分断化がホオノキの繁殖過程に与える影響」館野隆之輔（鹿児島大学・農）

第 445 回 11 月 11 日（土）熊本（熊本大学理学部）

「深海性ソコムジンコ類群集の時空間変異と、干潟生態系との共通性」嶋永元裕（熊本大学沿岸域環境科学教育研究センター）

第 446 回 11 月 25 日 宮崎（宮崎大学教育文化学部）

「針葉樹人工林における自然林の再生—伐採後の再生メカニズムを探る—」山川博美（鹿児島大学大学院連合農学研究科）

「宮崎の野生植物の現状」南谷忠志（宮崎植物研究会）

第 447 回 11 月 25 日 佐賀（佐賀大学菱の実会館）

「コニシキソウの成長様式と季節により異なる種子散布様式」大西義浩・鈴木信彦（佐大・農）

第 448 回 12 月 2 日 福岡（九州大学理学部）

「アメンボの潜水産卵」平山寛之（九州大学大学院理学府生物科学専攻）

第 449 回 12 月 9 日 鹿児島（鹿児島大学理学部）（同時開催 SSH 活動中間報告会）

共催 鹿児島大学理学部生命化学科生命機能講座

後援 鹿児島県高等学校教育研究会理科部会

高等学校における生物研究成果発表

【口頭発表】

「薩摩半島に分布するカンアオイ属の研究—キンチャクアオイの生育環境、種内変異—」市来農芸高等学校（生物部）：坂元友成、南田恭兵、丸尾直也

「桜島溶岩地帯のアリ相」池田高等学校（SSH 課題研究生物班）：田代和馬、林加奈子、長濱梢、米田万里枝、海老原研一、瀧波りら、宿里宏美

「メダカの流れ走性」国分高等学校（理数科 生物班）：鬼塚尚宏、丸山慶太、川越千奈美

「鹿児島県川辺町におけるオトシブミ類とその寄生蜂

に関する研究」錦江湾高等学校（サイエンスクラブ）：  
上園翔平、蔵満司夢

【ポスター発表】

「夜行性、昼行性魚類の視覚機能と行動性の違い」錦江湾高等学校（SSH 課題研究生物班）：木場瑞恵、堀脇いつき、堀之内亜沙美、川田原知世

「生物窒素固定—マメ科植物と根粒菌の共生に関する研究—」錦江湾高等学校（SSH 課題研究生物班）：柳元佑介、川上圭祐、榎原章太

「アリの DNA 解析」池田高等学校（SSH 課題研究生物班）：石原美紀、今村彩香、江藤あすか、谷真琴、辻畑志帆子、宮澤秋子、四元千佳、梅原誠、古川智史、古田愛華、小澤真璃、田口茉莉、松園阿佐美、栗巢孔士

【特別講演】

「心筋 L 型  $Ca^{2+}$  チャネルの活性調節機構」鹿児島大学大学院・歯学部総合研究科・神経筋情報生理学研究室 袁部悦子

第 450 回 12 月 9 日 長崎（長崎大学文教キャンパス総合研究棟 109 番講義室）

「ニワトリ足腱組織コラーゲンにおける物理的強度と線維構造の関係について」小野俊雄、馬場友巳、小早川健、根本優子、根本孝幸（長崎大学大学院歯学部総合研究科口腔分子生化学）

「ラット小腸虚血再灌流モデルにおけるアポトーシス誘導と Fas/FasL 系及び Bcl-2/Bax 系の関与」安樹才、菱川善隆、小路武彦（長崎大学大学院歯学部総合研究科組織細胞形態学）

「長崎県野母崎周辺のクロメ群落の衰退と海水懸濁物中の過酸化脂質」桑野和可 \*1・阿南慎也 \*2・鈴木賢明 \*1・吉越一馬 \*2（\*1 長崎大・院・生産科学、\*2 長崎大・水産）

「サハラ以南アフリカの主要マラリア媒介蚊であるガンビエハマダラカ姉妹種幼虫の個体群動態の解明」都野展子（長崎大学熱帯医学研究所生物環境分野）

「タイラギの殻体運動と潜砂行動」鈴木健吾（独立行政法人水産総合研究センター西海区水産研究所）

第 451 回 1 月 27 日 大分（大分大学教育福祉科学部 300 号教室）

「一の谷池の生態系を調べる」

高校生発表：加藤優喜・安部紀子・仁田野麻葉・山本沙耶（大分県立大分舞鶴高等学校 科学部生物班 指導者：細井利男教諭）

「大分の貝類」濱田保（マリンカルチャーセンター）  
「荒廃した里山の現存植生と種の多様性を生かした谷津田の圃場整備の事例」須股博信（大分環境カウンセラー協会）

(4) 地区会報 50、51 号発行（2006/8/31、12/31）

## お知らせ

### 1. 公募

日本生態学会に寄せられた公募について、①対象、②助成又は賞などの内容、③応募締め切り、④申し込み・問い合わせ先をお知らせします。

#### (1) (財)とうきゅう環境浄化財団 平成 20 年度研究・活動助成

- ① 産業活動または住生活と多摩川およびその流域との関係に関する調査および試験研究
- ② 排水・廃棄物等による多摩川の汚染の防除に関する調査および試験研究
- ③ 多摩川およびその流域における水の利用に関する調査および試験研究
- ④ シンポジウム、音楽会あるいは出版等による環境啓発活動や、歴史的な遺産あるいは社会システムの維持保全・回復運動等、多摩川およびその流域における環境保全や文化の創造に広く寄与するもの。

② 学術研究：1 件あたりの助成金総額の上限額 400 万円  
（単年度の助成金上限額 200 万円）

一般研究：1 件あたりの助成金総額の上限額 100 万円  
（単年度の助成金上限額 100 万円）

③ 平成 20 年 1 月 15 日（火）

④ 財団法人とうきゅう環境浄化財団

〒150-0002 東京都渋谷区渋谷 1 丁目 16 番地 14 号（渋谷地下鉄ビル内）

TEL：03-3400-9142 FAX：03-3400-9141

### 2. 第 28 回（2007 年度）関東地区生態学関係修士論文発表会開催のお知らせ

恒例の生態学関係修士論文発表会が下記の通り東邦大学において開催されます。この発表会は、1981 年に第 1 回が茨城大学で開催された歴史ある発表会です。本年度修士課程を修了される大学院生に、その研究成果を発表する機会を提供するものです。この発表会では日本生態学会関東地区会の会員・非会員に拘らず発表できます。学部生・大学院生の皆さん、先生方、研究所にお勤めの研究者の方々をはじめ、多くの皆様の御来聴もお待ちしております。

主催：生態学会関東地区会

開催日：2008 年 3 月 1 日（土）

会場：東邦大学理学部Ⅲ号館（千葉県船橋市三山 2-2-1）  
・JR 総武線「津田沼駅」北口 4 番バス乗り場から、三山車庫行、二宮神社行、八千代台行、または 5 番バス乗り場から日大実羽行、八千代台行のいずれかに乗車し、「東邦大学前」で下車（駅から 10～15 分）  
・京成本線「京成大久保駅」下車、徒歩約 10 分

URL：<http://www.sci.toho-u.ac.jp/accessmap/index.html>

問い合わせ先：

東邦大学大学院理学研究科地理生態学研究室 気付

第 28 回関東地区生態学関係修士論文発表会事務局  
〒 274-8510 千葉県船橋市三山 2-2-1  
Tel&Fax: 047-472-1159 (東京湾生態系研究センター内)  
E-mail: kantou\_master@yahoo.co.jp

## 書 評

根井正利・S. クマー著「分子進化と分子系統学」  
根井正利監訳・改訂 大田竜也・竹崎直子共訳  
培風館 本体価格 7,000 円 ISBN:978-4563078010

生態学の領域においても「分子生態学」という分野が隆盛し、今や分子系統学を研究の中で使うことが珍しくなくなっている。分子系統学は、DNA やアミノ酸の配列データを使って、生物の系統関係を推定する分野であるが、その統計的手法はたいへん複雑で分かりにくい。もちろん実際の分子系統解析は、既存のプログラム（その多くは無料で配布されている）を利用して行なうことができるので、自分で全てを完全に理解していなくても、コンピューターの扱いに多少慣れていれば系統推定は可能である。しかし肝要なのは、分子進化の基本的な機構を理解し、系統推定の基本的手法を理解した上でそうしたプログラムを使うことである。

本書は、分子進化学の指導的な研究者の一人である根井正利氏が、S. クマー氏とともに 2000 年に出版したテキスト（英語版。オクスフォード大学出版局）の翻訳・改訂版である。根井氏は、1987 年に「Molecular Evolutionary Genetics」を著し、分子進化学とその応用分野の骨組みを紹介した（日本語版「分子進化遺伝学」は五條堀孝・斎藤成也訳、培風館、1989 年）。この前著では、遺伝子頻度データの解析方法が主な課題だったが、それから間も無く世の中は大量シーケンシング時代に突入し、塩基配列データの解析結果に基づく論文がそこら中にあふれ出し、すっかり状況は変わってしまった。1980 年代には塩基配列データを得ることはまだ相当労力がかかり、分子系統学はまだ限られた研究者のものだったが、PCR と自動シーケンサーが普及し、容易にデータを得られる時代になると、大量に得られる塩基配列データから何をどう読み取るか、ということに誰もが頭を悩ますようになってきた。このような時代の流れの中で、実際の進化研究に役立つ分子系統学の統計的手法を紹介する目的で書かれたのが本書である。

本書では、アミノ酸・塩基配列の進化的変化の統計的側面を紹介し、代表的な系統樹推定法（距離法、最節約法、最尤法）について、その原理と計算過程が説明されている。さらに、系統樹の信頼性、系統樹間の統計的比較、分子時計と線形化系統樹、祖先タンパクのアミノ酸配列の復元、遺伝的多型、自然選択の検出、集団系統樹、といった重要なテーマについても解説されている。それぞれのテーマについて具体的な研究例や、MEGA, PAUP\*, PHYLIP などの系統解析プログラムを用いて計算した例が紹介されているので、内容を理解する助けとなる。

分子進化学と分子系統学の方法論に対する根井氏とその研究グループの貢献は膨大なもので、本書で引用され

ている論文も、根井氏ご自身が関係しているものが多い。例えば、根井氏は斎藤成也氏とともに、最もポピュラーな距離法である近隣結合法を提唱した。また、系統樹における枝ごとの進化速度の一定性の検定では、本書の訳者の一人、竹崎直子氏とともに開発した検定法が紹介されている。一方で、分子系統学に関わる多彩な研究者によって産み出される手法は益々多様化しており、多くのプログラムが作成されて、その中から新たな流行が生まれている。我々ユーザーはとかく新しい機能を備えた手法を追いすがちだが、本書はそのような流行にはあまり惑わされず、根井氏ご自身の視点でまとめられているので、種々の雑誌で見かける分子系統学的手法のトレンドには迎合していないという印象を受ける。例えば、近年急速に普及しているベイズ法による系統樹推定（とくに MrBayes というソフトウェアに基づくもの）については、そのアルゴリズムの概略を示した上で、問題点を指摘し、現時点での利用には消極的な見解を述べている。

分子進化の過程は非常に複雑なので、系統樹推定や分岐年代の推定にあたっては、どの方法が最適かということに関しては単純な答えは存在しないように思われる。どの方法を用いればよいかは、分子系統学の進展の時点々々で、我々ユーザー自身が何らかの論評に基づいて判断しなければならない。しかし個々の方法論についての論文を直接見ても、素人にはなかなか理解しがたい。本書は基本原理を簡潔に説明しながら、さまざまな手法を広く紹介しており、また日本語で読めるという点において、初学者にとって有用な本であることは間違いない。分子系統学的手法を用いている生態学者もぜひ座右に置いておきたい一冊である。

（京都大学大学院理学研究科 曾田貞滋）

「きたない川？にもこんないるで！」

大阪自然史博物館編著（2007）『大和川の自然』（大阪市立自然史博物館叢書（1））132pp. 東海大学出版会。ISBN:4-486-01767-7

東の綾瀬川、西の大和川。このランキングは、もちろん、どこぞの相撲大会の番付表の東西横綱のものではない。汚濁した一級河川の、東日本と西日本の代表である。毎年夏に国土交通省が公表する全国の一級河川を対象とした水質調査の結果では、昨年度を除く過去 10 年間、ほぼ例外なくこの 2 つの川が、1 位と 2 位を占めてきた。奈良県の低山地帯に源を發して、奈良盆地全体を集水域とし、大阪府の中南部を流れて大阪湾にそそぐ大和川は、流域全体の平均 BOD（生物化学的酸素要求量）がかつては 10 ppm 前後、2005 年も 6.4 ppm はあってこの年度のダントツのワースト 1。この数値だけ見れば、非常によごれた川であることが想像できるだろう。

しかし、そんな大和川にも、多様な水辺の生物たちがたくさん棲んでいる！ この事実を視覚的にわかりやすく示した好著がこの本である。出版の狙いを端的に示した腰帯の惹句「きたない川？にも、こんないるで！」が、まず、非常に効いている。

編著者の大阪自然史博物館は、2002 年に「大和

川水系調査グループ“プロジェクトY”を立ち上げ、博物館の友の会の会員や小学生からお年寄りまでの一般市民約150人も巻き込んで、流域全体の生物調査を行った。その調査結果が2006年夏に博物館特別展「大和川の自然—きたない川?にもこんないるで!—」として展覧され、この本ができあがった。4年間におよぶ市民参加型の広域生物調査の成果が、見事に集約された1冊である。

第1章「大和川とは」では、流域の古地理や地質・地形・気候の特色、江戸時代の流路付け替えの歴史、水質調査の結果が多くの図版とともに示されている。第2章の「特選大和川観察ポイント」では、水辺の生物観察の格好のポイントとそこで見られる生物たちが紹介され、交通情報も盛り込まれている。65ページにわたる第3章「大和川水系の水辺の生き物」がこの本の眼目であり、“プロジェクトY”で確認された魚類・両生類・爬虫類・甲殻類・貝類・河口の海藻や多毛類・鳥類・ほ乳類・昆虫類・植物の約100種が、原則として1種づつ解説されている。また、ほとんどの種には白黒写真と大和川水系での分布図が付されている。その解説の仕方も工夫されていて、1種ごとに、その特徴を簡潔に記した枠囲みの解説があり、その次にもっと詳しい説明が本文として続く形になっている。枠囲みの解説の中には、小川・水路、本流、河川敷、水田、ため池、河口の6つの区分のどこに生息しているかが図示され、近縁種との区別の仕方や食性、特徴的な行動、繁殖期や開花期なども記されている。その枠囲みの部分を見るだけで、各種の簡単な特徴がわかるというわけだ。ただし、カワゲラ・カゲロウ・トビケラといった水生昆虫の主要分類群はほとんど扱われていない点。アマチュアによる同定が難しいためであろう。

第4章「大和川水系の生物をおびやかす要因」、第5章「人と大和川の関わり」、第6章「大和川水系の生物多様性の特徴と未来」では、古くから開けた奈良盆地と大阪平野を流れる大和川の、人と自然との関わりの歴史や自然保護、生物保全の問題が要領よくまとめられている。

132ページのコンパクトな本の中には、巻頭カラー図版が8ページ(カラー写真64枚)、本文には“プロジェクトY”で確認された生物の白黒写真が96枚、各種の分布図が65枚もあり、巻末には、「特選大和川観察ポイント」を示した折り込み地図もある。“プロジェクトY”に参加した一般市民8人の感想もコラム形式で紹介されており、アマチュアに親しみを感じさせる内容も盛り込まれている。そのコラムからは、プロの研究者では見過ごしてしまうような、アマチュアならではの苦労話や感動的体験もわかり、市民参加型の調査を企画・実施する時の参考にもなる。視覚的にも、体裁としても、文章表現でも、サービス精神がてんこもりで、読む人を飽きさせない工夫が凝らされている。

大和川の自然史と人との関わりを記した教科書としても、フィールド図鑑や自然観察ハンドブックとしても使える体裁と内容を持ち、中学校や高校での総合学習用の教材としても、大学の野外実習用の参考書としても利用

できる、広い用途を持った本である。大和川の水質改善に向けた行政、市民、企業の取り組みは現在でも直実に進められているが、この本を活用することで、その取り組みを啓蒙という形で大いに加速させることができるだろう。

さらに、一級河川の水系全体の生物相を、一般読者にもわかりやすく示した啓蒙書としても、画期的なものであろう。研究者、市民、行政、企業の「協働」による自然保護活動が推奨される中、市民参加型の生物調査のあり方と結果の公表の仕方を考える上で、大いに参考になるはずである。見過ごされがちな、身近な自然に目を向けることで、人と自然の共存のあり方を考えるきっかけとして最良の、アイデアにあふれた一冊である。

(奈良大学教養部 岩崎敬二)

スティーブ・パーカーほか著 名取洋司訳 遠藤秀紀監訳(2007)「図説哺乳動物百科(1~3巻)」朝倉書店  
ISBN: 978-4-254-17731-2(第1巻) 978-4-254-17732-9(第2巻) 978-4-254-17733-6(第3巻)

空を翔るコウモリ、海洋にジャンプするクジラ、サバンナを疾走するチーター、巨大な群れをつくるヌー。どれもお馴染みの光景だ。哺乳類は、多様な形態、独自の繁殖様式と複雑な生活史、温血性の獲得によってあらゆる環境へ適応放散している。現在、世界には約4700種の哺乳類が生息しているものの、IUCN(2006)のレッドリストによれば、その約1/4が「危急種」以上にランクされている。脅威の要因はさまざまだが、貴重な哺乳類たちを本来の生息地とともにまるごと保全していくことが喫緊の課題である。

さて、その哺乳類の世界を俯瞰してみよう。通常のアプローチは、形態に基づいた分類群ごとに生態や生活史をたどり、ハビタットと生息環境へと迫るやり方だ。これには“世界の哺乳類図鑑(Walker's Mammals of the World)”か“The Encyclopaedia of Animals”(『動物大百科』)が定番だ。だが、分類から始まるために生息環境における哺乳類同士のつながりが見えない。逆から、つまりハビタットや生息環境から哺乳類たちの世界を眺めてみたい。ロンドン動物学会科学会員のスティーブ・パーカー(S. Parker)や、鳥類の研究者であり一般向けの科学書(“Life”や“Evolution”)の執筆で有名なジョナサン・エルフィック(J. Elphick)らが、大胆にもそれを試みている。それが『図説哺乳動物百科』(全3巻)だ。

1巻は、総説、アフリカ、ヨーロッパ編である。総説で「哺乳類とは」(生物学の特徴)、「進化」、「分類」、「人間の役割」が手際よくまとめられ、その後、地理区を各章とした本編に入る。各章の最初は見開き地図で、生息環境の区分が概観される。アフリカは「草原」、「砂漠」、「山地」、「湿地」、「森林」に分類され、それぞれのハビタットごとに、主要な哺乳類の生態や行動、形態が多数の写真とともに解説されている。ヨーロッパの生息環境も同じ5分類である。2巻は北アメリカと南アメリカ編で、北アメリカでは砂漠と山地がまとめられ「山地と乾燥地」に、それに「極域」が加わる。南アメリカはもと

の5分類である。3巻は、オーストラレーシア、アジア、海域で、オーストラレーシアでは「山地」に代わって「島」が加わり、海域は「沿岸域」、「外洋」、「極海」に分類されている。写真はいずれも秀逸で美しく、楽しい。

おそらく本書は、若い方々に、単なる種の分類や羅列主義を超えて、ハビタットや生息環境がもたらす形態や行動、適応をありのままに紹介することに力点があるように思われる。解説の内容はやさしく、野生動物や哺乳類に興味をもつ中・高校生に最適である。と書いたがいや待て。それにしても各章の扉の地図が目には焼きつく。

そこには、人間に破壊され、攪乱される以前の生態的環境区分が空々しいほどの広がり描かれている。人間の影がまるでない。その大半が人間の都市、居住地、農耕地へと転化されてしまった。この現実との乖離こそ著者らの主張なのかもしれない、と気付かされた。哺乳類たちを本来の生息地とともに本気で保全していくことの大切さを、原点に立ち返ってわれわれに教えているようだ。

(早稲田大学人間科学部 三浦慎悟)

# 日本生態学会 会則

(2007年3月改正)

## 第1章 総 則

**第1条** 「名称」本会は日本生態学会（The Ecological Society of Japan）という。

**第2条** 「目的」本会は生態学の進歩と普及をはかることを目的とする。

**第3条** 「事業」本会はその目的を達成するために、つぎの事業を行なう。

- i) 講演会、研究発表会、研究旅行など。
- ii) 内外の生態学に関係ある諸学会、諸機関との連絡。
- iii) 会誌および図書などの刊行配布。
- iv) そのほか本会の目的を達成するに必要な事項。

## 第2章 会 員

**第4条** 「会員」本会の会員は正会員（一般、学生）（A、B、C）、団体会員（A、B、C）、賛助会員、名誉会員とする。

- i) 正会員は本会の趣旨に賛成し、所定の入会手続きを経て、所定の会費を納める個人。
- ii) 団体会員は本会の趣旨に賛成し、所定の入会手続きを経て、所定の会費を納める団体。
- iii) 賛助会員は本会の趣旨に賛成し、別に定める賛助会員会費を納める個人または団体。
- iv) 名誉会員は日本の生態学および本会の発展に大きな功績のあった個人のうちから、全国委員会の推薦により、総会において決定される。

**第5条** 「入会」本会に入会を希望するものは、会長あて、住所、職業（所属機関）を記入した入会申込書に、申込当年度分以上の会費をそえて提出しなければならない。

**第6条** 「退会」退会しようとするものは、会長あて、退会届を提出しなければならない。ただし、退会届を提出したその年いっぱい（12月末日まで）は引き続き日本生態学会の会員としての権利と義務を有する。すでに納めた会費は払いもどさない。

**第7条** 「権利」会員はつぎの権利をもつ。

- i) 会誌（Ecological Research、日本生態学会誌、保全生態学研究）および印刷物（名簿、大会プログラムなど）の配布をうけること。ただし会誌については、A会員はEcological Researchと日本生態学会誌、C会員は保全生態学研究のみの配布を受ける。
- ii) 会誌に投稿すること（正会員、名誉会員に限る）。ただし、C会員は日本生態学会誌への投稿はできない。
- iii) 本会の会合に出席し、研究発表・講演を行い、意見をのべること（正会員、名誉会員に限る）。ただし、C会員は生態学会大会での発表はできない。
- iv) 本会の事業・運営に関し、全国委員会に対しまたは総会において意見をのべること。
- v) 本会の会長・全国委員を選任し、またはこれらに選任されること。ただしこの権利は正会員に限る。

**第8条** 「義務」会員はつぎの義務を負う。本会の会則を守ること。（会の運営を妨げ、あるいは会の名誉を著しく毀損したと認められる場合は、全国委員会の決議により退会させ、または除名することがある）

## 第3章 事務局、編集部および地区会

**第9条** 「事務局、編集部」全国委員会は事務局および編集部の所在地をきめる。

**第10条** 「地区会」全国を北海道、東北、関東、中部、近畿、中国・四国、および九州の7地区にわけ、各地区に地区会をもうける。国内在住の会員は各居住地の地区会に属する。

## 第4章 役 員

**第11条** 本会につぎの役員をおく。

- i) 会長 1名 ii) 全国委員 若干名 iii) 幹事長 1名
- iv) 幹事（庶務、会計、編集）若干名 v) 常任委員 若干名
- vi) 会計監事 2名 vii) 編集委員長 3名 viii) 編集委員 若干名
- ix) 各種専門委員 若干名

**第12条** 会長は本会を代表し、会務を統べる。会長は正会員の互選（単記無記名）によって定める。この場合、全国委員会は会長候補者を5名推薦することができる。会長の任期は2年とし、1月から始まるものとする。再選をさまたげる。

**第 13 条** 全国委員は、全国から正会員の互選によって選ばれた 15 名、および各地区から正会員の互選によって選ばれた各 1 名とする。その任期は 2 年とし、1 月から始まるものとする。連続三選をさまたげる。会長および幹事長は全国委員をかねることができない。

**第 14 条** 会長選出は就任の 1 年前までに行う。

2 全国委員改選は前年度内に行う。

3 会長および全国委員の選出に関するその他の事項は別に定める。

**第 15 条** 幹事長、幹事、会計監事、および編集委員長は全国委員会の協議により、正会員の中から選び、会長が委嘱する。任期は 3 年とし重任してもよい。編集幹事は編集委員長をかねることができる。常任委員は会長の指名にもとづき、全国委員会の議を経て選出する。任期は 2 年とし重任してもよい。

**第 16 条** 編集委員には Ecological Research 担当者、日本生態学会誌担当者および保全生態学研究担当者をおく。各編集委員は十数名とし前編集委員会の協議により正会員から選び、全国委員会の承認を経て、会長がこれを委嘱する。任期は 3 年とし、重任してもよい。編集幹事は編集委員をかねる。

**第 17 条** 各種専門委員は全国委員会の協議により必要に応じて正会員中から選ぶ。検討委員は主に正会員の中から選ぶ、必要に応じては非会員から選ぶ。会長がこれを委嘱する。任期、人数はその都度決定する。

## 第 5 章 機 関

**第 18 条** 「総会」総会は会の最高議決機関であり、会務、会計そのほか重要事項を議決する。会長は毎年 1 回これを召集しなければならない。ただし全国委員会が必要と認め、また正会員の 3 分の 1 以上から請求があった時には会長は臨時に召集しなければならない。

**第 19 条** 「全国委員会」全国委員会は会長および全国委員で構成し、会長が議長となる。全国委員会では会の運営方針を審議する。ただし緊急事項は総会に代って決定することができるが、次回総会において承認を得なければならない。全国委員会は会長がこれを召集する。ただし全国委員の 3 分の 1 以上の申出があった時には開催しなければならない。

**第 20 条** 「常任委員会」常任委員会は会長、次期会長、常任委員および幹事長、学術会議会員、庶務幹事、会計幹事、編集委員長などで構成し、本会の運営に関する緊急要務について審議する。その審議結果のうち、執行事項については全国委員会の承認または追認を求めるものとする。

**第 21 条** 「編集委員会」編集委員会には、Ecological Research 編集委員会、日本生態学会誌編集委員会および保全生態学研究編集委員会をおく。各委員会は編集委員長、編集幹事および編集委員で構成し、編集委員長がこれを召集して議長となる。編集委員会では、会誌の編集業務を行なう。人数は必要に応じて決めることができる。それぞれの編集委員会の少なくとも半数は正会員から選出する。

**第 22 条** 「各種専門委員会」各種専門委員会は、委員長ならびに委員で構成し、委員長がこれを召集して、議長となる。審議結果のうち執行事項については、全国委員会の承認または追認を受けるものとする。

**第 23 条** 「事務局」事務局は幹事長および幹事をもって構成し、会長を助けて会務を運営する。

**第 24 条** 「学会誌刊行協議会」それぞれの学会誌の刊行業務（刊行方針・形態）や会誌会誌関連事項等を協議する学会誌刊行協議会を置く。委員は、各学会誌の編集委員長、編集幹事、前編集委員長、次期編集事務局予定者 1～2 名、庶務幹事、編集委員長が推薦する編集委員によって構成される。協議会の委員長はその編集委員長が兼ね、委員長が推薦した委員については、全国委員会の承認を受ける。任期は編集委員長と同じとする。

## 第 6 章 会 計

**第 25 条** 本会の経費は会費そのほかの収入をもってあてる。

**第 26 条** 本会の会計年度は毎年 1 月 1 日に始まり、12 月末日に終る。

**第 27 条** 会長は事業年度間の収支決算をつぎの総会に報告してその承認を受けなければならない。

**第 28 条** 本会に対する寄付または補助金などは全国委員会の議を経て会長がこれを受けることができる。

## 第 7 章 表 彰

**第 29 条** 生態学の活性化と発展をはかるため、本会では以下のような賞をもうけ、会員の表彰をおこなう。各賞受賞者の選定などの規定はそれぞれの細則に定める。

- i) 「日本生態学会賞」顕著な研究業績により生態学の深化や新たな研究展開に指導的役割を果たした者を主な対象者とする。
- ii) 「日本生態学会宮地賞」すぐれた研究業績を持ち、生態学の発展に大きな貢献をしている本学会の若手会員を主な対象者とする。

- iii) 「日本生態学会大島賞」生態学の発展に寄与している本学会の中堅会員を主な対象とする。
- iv) 「日本生態学会功労賞」本学会の運営・活動または生態学の普及・発展に目覚ましい貢献をした者を主な対象者とする。
- v) 「日本生態学会 Ecological Research 論文賞」Ecological Research 誌の各巻に掲載された論文の中から特に優れた論文を選考し、その著者に対して贈る。
- vi) 「日本生態学会全国大会賞」本学会主催の全国大会において若手研究者によって発表されたポスターの中から優秀な作品に対して優秀賞を贈る。また、その中でも特に優れた作品に対しては最優秀賞を贈る。

## 第 8 章 雑 則

**第 30 条** 会則の変更は総会において出席者の 3 分の 2 以上の賛成を必要とする。

**第 31 条** 会誌の刊行そのほか本会の行なう事業に関する細則は別に委員会において定める。

### [付 則]

**第 1 条** 会員の会費は前納とする。会費年額は総会の議を経て決定し、会誌に明示する。

**第 2 条** 1 年分滞納した会員には会誌の発送を停止し、2 年分滞納した時は自動的に退会したものと認める。



京都大学  
生態学研究センター  
Center for Ecological Research  
Kyoto University

京都大学生態学研究センター  
〒 520-2113 滋賀県大津市平野 2 丁目 509-3  
Tel : (077) 549-8200 (代表), Fax : (077) 549-8201  
センター長 高林純示

Center for Ecological Research, Kyoto University  
2-509-3 Hirano, Otsu, Shiga,  
520-2113, Japan  
Home page : <http://www.ecology.kyoto-u.ac.jp>

共同利用委員会からのお知らせ

2008 年度 (平成 20 年度) 京都大学生態学研究センター  
共同利用事業公募要項

京都大学生態学研究センターでは、2008 年度の共同利用事業の一環として以下の内容のものを公募します。

なお、企画には本センターの教員の参加があることが条件となります。

1. 公募事項

- (1) 研究会 : 生態学およびその関連分野での重要な研究課題について、研究結果のまとめ・現状分析・将来の研究計画の作成などを行い、当センターの共同研究の推進に役立つ研究会の企画を募集します。
- (2) 集中講義 & セミナーおよび野外実習 : 学部学生・大学院生を受講対象とし、全国に公開されるもので、生態学およびその関連分野において重要だが教育の場が限られる課題についての集中講義 & セミナーおよび野外実習の企画を募集します。

2. 開催期日

2008 年 5 月 1 日から 2009 年 2 月 28 日までの期間に開かれるものとします。

3. 採択件数

研究会および集中講義 & セミナー・野外実習、合わせて 5 件程度の採択を予定しています。

4. 応募資格

大学その他の研究機関に所属する研究者、またはこれと同等の研究能力を有すると認められる方とします。

5. 申請方法

研究会、集中講義 & セミナーおよび野外実習のそれぞれについて、下記の必要事項を記載した企画書を作成し、郵送、ファックスまたは、E-mail にて直接当センターに提出して下さい。

必要記載事項 :

- (1) 申込者氏名・所属先および職・所属先住所・電話・ファックス・E-mail
- (2) 研究会、集中講義 & セミナー、野外実習の別
- (3) 課題名
- (4) 開催予定日時
- (5) 開催予定場所
- (6) 開催目的および内容の概略 (400 字程度)
- (7) 参加予定者の一覧 (氏名・所属)

なお、申請が採択された場合、所属機関 (部局) の長を通して、正式の研究会等申請書を改めて提出していただきます。

6. 申込期限 : 2008 年 4 月 4 日 (金) 必着。

7. 企画書送付先

〒 520-2113 大津市平野 2 丁目 509-3

京都大学生態学研究センター 共同利用担当  
TEL : (077) 549-8200 ( 代表 )  
FAX : (077) 549-8201  
E-mail : kyodo-riyo@ecology.kyoto-u.ac.jp  
郵送の場合は、封筒の表に「共同利用事業企画書在中」と朱書きして下さい。

#### 8. 選考

2008 年 4 月中旬に行います。

#### 9. 所要経費

研究会の出席者、集中講義 & セミナーの講師の旅費、場合によってはその他必要経費の全部または一部を、当センターにおいて支出します。1 件について 20 万円以内を予定しています。

#### 10. 報告書および論文の提出

(1) 共同利用事業終了後、1 ヶ月以内に報告書を当センターに提出して下さい。なお、提出された報告書は、その全部または一部を当センターのセンター

ニュースおよび業績目録に掲載します。

(2) 共同利用事業によって得られた成果を論文等により発表する場合には、京都大学生態学研究センター共同利用事業の援助を受けた旨を論文等に記していただくをお願いします。また、別刷り 1 部を当センター共同利用係宛に提出して下さい。

この公募内容につきまして、不明な点がございましたら、当センター共同利用担当に御照会下さい。

#### ※京都大学生態学研究センター全国共同利用に関する申し合わせ

- (1) 全国共同利用のセンターとして、生態学及びその関連分野に関し、次の項目について共同利用を実施する。
  - 1) 共同研究  
生態学の特別研究プロジェクト及び共同研究、個別共同研究
  - 2) 共同利用実験施設等共同利用  
野外研究施設・大型機器等を利用する実験、研究
  - 3) 施設利用 ( ビジター・システム )
  - 4) 研究会・野外実習・集中講義並びにセミナー
  - 5) その他
- (2) 上記の目的達成のため、必要に応じ招へい外国人学者を受入れ、協力研究員・その他を委嘱することができる。

### — 協力研究員 (Affiliated Scientist) に関するお知らせとお願い —

生態学研究センターでは全国共同利用研究施設として、開かれた研究活動を活発化するために、協力研究員制度を設けています。協力研究員は、担当教員とご相談のうえ、施設の一部をセンター員に準じて利用できます。08 年 3 月末で任期満了の協力研究員におかれましては、これまでのご協力に対して厚く御礼申し上げます。引き続き、08 09 年度の協力研究員としてセンターの共同利用を希望される場合は、08 年 3 月 17 日 ( 月 ) までに申請書をご提出いただくようお願いいたします。申請書の様式はセンター HP (<http://www.ecology.kyoto-u.ac.jp/ecology/activities/images/gs0607.doc>) からダウンロードできますので、必要事項を入力のうえ電子メールでお送り下さい。または、同封の申請書に記入のうえ、郵送ないしは Fax でお送り下さい。

新規の協力研究員も広く募集しています ( 申請は随時受け付けています )。

申請書の提出先・問い合わせ先  
京都大学生態学研究センター共同利用担当  
〒 520-2113 滋賀県大津市平野 2 丁目 509-3  
E-mail : kyodo-riyo@ecology.kyoto-u.ac.jp  
TEL : 077-549-8200 Fax : 077-549-8201

#### ※京都大学生態学研究センター協力研究員の委嘱についての申し合わせ

- (1) 生態学研究センター ( 以下「センター」という ) の研究活動を推進するため、学内外の研究者に協力研究員を委嘱することができる。
- (2) 協力研究員は、教授会の議に基づき、センター長が委嘱する。
- (3) 協力研究員の任期は原則として 2 年とする。

### センターの動向

- 1) 山村則男教授が、7 月 1 日付で総合地球環境学研究所へ異動されました。
- 2) 2007 年度外国人研究員 ( 客員教授 ) として 11 月 1 日から 1 月 31 日まで Mouringh Willem Sabelis 氏 ( アムステルダム大学・オランダ ) を招聘しております。
- 3) 2007 年度外国人研究員の Delphine Noemi Estelle Calas 氏は、9 月 30 日で任期を終え帰国 ( フランス ) されました。
- 4) 2007 年度日本学術振興会外国人招聘研究者 ( 短期 ) の John Haynes Werren 氏 ( ロチェスター大学・アメリカ合衆国 ) が 11 月 2 日から 12 月 2 日の予定で滞在中です。

# 重要なお知らせ！

## 学会誌編集事務の統合について

Ecological Research 編集事務（現九大内）および日本生態学会誌編集事務（現京大生態研内）は 2008 年より日本生態学会事務局内に統合されます。2008 年 1 月 1 日より学会誌（ER・生態誌・保全誌）編集に関する連絡・お問合せは下記宛にお願いします。

住所 〒 603-8148 京都市北区小山西花池町 1-8  
日本生態学会内 ○○編集担当宛

Tel & Fax 075-384-0250

E-mail ER について [ecores@mail.esj.ne.jp](mailto:ecores@mail.esj.ne.jp)  
生態誌について [jjedit@mail.esj.ne.jp](mailto:jjedit@mail.esj.ne.jp)  
保全誌について [hozen@mail.esj.ne.jp](mailto:hozen@mail.esj.ne.jp)